



第 4 章

これからの生涯学習

これからの社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会(knowledge-based society)*」の時代であるといわれています。グローバル化が進み、技術革新が絶えず生まれ、次々と知識の入れ替えが起こります。それは時にはそれまでの自分の持っていた概念や意識を全く異なったものに転換させることもあります。そのために、幅広い知識や柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になります。これは、年齢や性別を問わず、この社会で生きる全ての人々の身に起こっていることです。

これまで、「生涯学習」という言葉は、人生後半の趣味や生きがいづくりのための学習というイメージが強く持たれてきましたが、時代の移り変わりや私たちの生活様式の多様化にともなって、私たちが学ぶ環境や目的にも変化が現れています。

そこで、本章では前章までの生涯学習の動向や期待をふまえ、これからの生涯学習に何が求められているのかを考えます。

※ 知識基盤社会(knowledge-based society)

平成17年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」で示された言葉。一般的に、知識が社会・経済を駆動する基本的な要素となる社会を指す。類義語として、知識社会、知識重視社会、知識主導型社会などがある。(参考:中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像(答申)」の用語解説、平成17年1月)



4 これからの生涯学習

1 みずからが答えを導きだす生涯学習

伝統的な社会では、先人の築いた知識や技術を体得することが、「学習」とされてきました。親や教師、上司や先輩が教えてくれることを身につけることによって、生活に必要な知識や技術を獲得し、課題を解決してきました。しかし、これからの社会は、そうした先人たちも経験したことのない新しい課題が次々と起こる社会でもあります。いまだ誰も体験したことのない技術に直面したり、正解の見えない課題に向き合うことがあります。その解決方法について、誰も確かな答えを持ちえてはいません。

私たちが抱える生活課題の学習には、そのことがよく表われています。例えば、子育ての課題です。父親の育児参加が叫ばれる昨今では、子育てと仕事の両立は、もはや女性だけではなく男性の課題でもあります。時代や地域によって子育て環境も異

なり、育児用品もめまぐるしく変わっていくために、自分たちの両親のアドバイスが役に立たず、数年前の子育て経験すらモデルとなりにくいこともあります。多量に溢れた正誤のわからないさまざまな情報は、迷いや不安を生みだします。

答えの見えない課題解決のためには、何かを記憶するための学習ではなく、みずからが多くの情報を収集し、考え、選択するための学習が必要になります。そのためには、同じ課題を共有する者同士が情報や意見を交換しながら答えを探し求めていくことも一つの方法です。そこでは、誰かが教えてくれるという受け身の姿勢ではなく、一人ひとりの知識や経験や意見を素材として相互に教育し合いながら、みずからが答えを導きだす学習が求められています。

4 これからの生涯学習

2

時代の変化に即した 学習能力を身につける生涯学習

高度情報社会はICT(情報通信技術)の発達を促し、日常生活に欠かせないほどにパーソナルコンピューターや携帯電話が普及しています。これにともない、インターネットと電子メールを通じて、世界中から多種多様で大量の情報を集め、匿名の他者とのコミュニケーションをとることが容易になりました。また、パーソナルコンピューターや携帯電話による情報発信機能は、「いつでも・だれでも・どこでも」社会参加と生涯学習の機会を生み出す可能性に開かれています。このような機能を積極的に活用できる、「情報選択・運用能力(メディア・リテラシー)」を身につける学習が求められます。

新しい技術は、新しい学習方法を生み出します。外出が困難な人々に対しても学習機会を積極的に広げることができます。また、インターネット技術の発達は、さまざまな生涯学習の自主グループ・団体・個人

の活動紹介をホームページなどを通じて行ったり、それらをつなげていく(リンクする)ことも容易に実現できるようになり、このようなメディアの利点を生かし、地域の交流とつながりが生まれる仕組みづくりを進めていくことができます。

しかし、他方で個人情報の流出問題や、インターネットを介しての誹謗中傷などの問題が、大人のみならず子どもの間でも起こっています。また、真偽のわからない情報に惑わされ、誤った情報を元に行動を起こしてしまう可能性も孕んでいます。そのためにも、私たちは情報を見極め、選択し、安全に活用していく力である「情報選択・運用能力(メディア・リテラシー)」が求められています。

こうしたメディア活用の適切な方法を学ぶことは、社会全体がますますメディアを活用する傾向にあって、老若男女を問わず重要な課題となってきます。



3 「新しい公共」を支える生涯学習

地域社会は、そこに暮らす人々の規範意識や相互扶助によってその基盤を成しています。人々が、私心を優先した独善的な振る舞いをすれば、多くの人々が共に生きる社会は形成できません。私たち一人ひとりが社会の一員として、よりよい社会を築くための努力が求められており、誰もが身近な地域社会で起こる課題に対し、「私は関係ない」という無関心な態度でいることはできません。

今日、私たちの生活する社会は行政だけでは対応しきれない複雑で多様な問題を含んでいます。良いまちや地域をつくるためには、これらの問題解決をすべて行政に任せるのではなく、自立した個人が公共的な活動に積極的に意見を述べ、かつ協力することを通して、住民と行政の協働によりまちづくりを進める必要性が論じられています。このように、それぞれの独立した個人が力を合わせ、みずからの意思に基づいて社

会の課題解決に取り組んでいく協働の営みは「新しい公共[※]」と呼ばれます。誰しものが、地域社会のなかの役割を自覚し、地域のなかで主体的に学び、その成果を新たなまちづくりに生かすことが求められています。

※新しい公共

平成15年3月の中央教育審議会答申において、「これまで日本人は、ややもすると国や社会は誰(だれ)かがつくってくれるものという意識が強かった」という指摘とともに、21世紀の教育が目指すものの柱として、「新しい『公共』の創造、国家・社会の形成に主体的に参画する日本人の育成」が提言された。新しい公共とは、この答申で述べられているとおり、「個人の主体的な意思により、自分の能力や時間を他人や地域、社会のために役立てようとする自発的な活動への意識を高めつつ、自らが国づくり、社会づくりの主体であるという自覚と行動力、社会正義を行なうために必要な勇氣、『公共』の精神、社会規範を尊重する意識や態度」を意味するものである。

生涯学習の振興にあたっては、個人の興味や関心に基づく学習と同時に、地域課題の解決や学習成果の社会還元など社会からの要請に基づく学習の両側面が期待されている。

4 これからの生涯学習

4 つながりと交流の生涯学習

私たちの暮らす現代社会の課題解決に共通することは、課題のそれぞれが世代内や特定の集団内のみで解決できる内容ではなく、世代・立場・活動内容を超えたつなごりの視点から、ものごとを捉え直してやることの必要性です。

社会には、年齢も職業も違い、人生や社会の経験も異なり、さまざまな考えを持った人々が暮らしています。個人や組織が、単独では解決できない課題を解決するためには、個人と個人、個人と組織、組織と組織が、相互に対等な関係を築きながら有機的につながり合い、協力しあっていくことが求められています。地域には、町会活動のほかにも、青少年育成活動、まちづくり活動、社会福祉活動、自主学習活動など、さまざまな自立的な活動が展開しています。このような地域のさまざまな組織、団体、グループ同士が連携したり、協働したりす

ることで、これまでにない発想を生み出したり、相乗効果による新しい可能性を広げることが期待できます。

また、これまで、多くの課題は「カネ」や「モノ」などの物質を投入する手法で解決することもできました。しかし、限りある社会資源を効率良く活用していくためには、人々が「知恵」を出し合い、新しい発想や仕組みを考え出し、課題を解決していくことが求められています。子育て支援、若者の社会的自立や社会参加、高齢層の社会参加など喫緊といわれる個別課題も、複合的に捉えなおすことにより、多様な学習を生み出す互恵的な関係の場が生まれます。地域の多様な学習資源・社会資源がつながることで、多世代間交流の場、相互支援の場、次世代育成の場、学習成果の還元の場として再構成することが課題解決の鍵になっていきます。